学習者と地域をつなぐ活動

-小学生との交流活動を例として-

岩澤和宏（国際交流基金関西国際センター）
Kazuhiro_Iwazawa@jpf.go.jp

【要約】

国際交流基金関西国際センターでは、学習者と地域をつなぐ活動として小学生との交流活動を定期的に実施している。交流活動形態の変遷や活動を行うに当たっての具体的手順について報告し、その意義や課題について考察する。

１．はじめに

国際交流基金関西国際センター（以下、「センター」）は、1997 年 5 月の設立以来、地域との交流に重点を置いてきた。それはセンターの研修参加者に日本文化や日本社会を実感してもらうために地域をリソースとして活用したいという側面もあったが、それ以上に南泉州地域に”よそ者”としてやって来たセンター関係者全員が地域社会に溶け込むための方策でもあった。現在、極自然な形で行われている地域交流・国際交流のイベントや地域交流団体の研修参加者支援も、地道な地域との交流の結果生まれたものだと言えよう。

視点を変えて地域社会の側からすると、特に年少時の国際交流や異文化体験が与えるプラスの影響は計り知れない。人との出会いは後々まで記憶される。1994 年 9 月に関西国際空港が開港し、泉南地域で道行く”ガイジン”を目にすることは増えたとは言え、実際に外国人と交流の機会を持つことはそれ程多くなかった。

本稿では、センターが行っている地域との交流事業の中でも大きな割合を占める小学生との交流活動・小学校訪問について報告する。実際に小学生との交流を行っている日本語教育機関は数多くあるものと推測されるが、その実践が報告された例は非常に少ないことを付記しておく。

２．「学校交流」の始まり

ここでは、近隣地域の小学校の交流について述べる。センターの交流事業は小学校のみならず、中学校、高等学校、大学とも交流活動を行っているが、近隣の小学校との交流例が最も多い。それは近隣小学校が最も身近な地元であることと、小学校の多くが正式な授業の一環と位置づけて交流を行っていることが理由として挙げられる。

「学校交流」も回数を重ねるごとにその内容や形態は変化してきた。初期の頃（小学校にもよるが 2000 年ごろまで）の学校交流は、研修参加者が小学生に新しいことを「教える」、いわゆる講義タイプが多かった。それが小学校で最も普通のスタイルで、小学校教諭も児童も最も慣れ親しんでいた形態だったからだと考えられる。

しかし、「交流」に焦点を当てた場合、それでは十分に目的が達成できたとは言いがたく、研修参加者の側から見ると同じ話を繰り返すだけで得るものが少なかった。

さまざまな試行錯誤の結果、交流活動には研修参加者と小学生双方からの働きかけが必要であることがわかってきた。一方的に講義するのではなく、お互い自分たちが持っているものを紹介することが肝要である。交換する情報そのものが大切なのではなく、その情報をいわば道具として人と人が交流することが目的なのである。双方に発信する情報があり、それをやり取りする形になるのは当然の流れでもあった。

３．交流を行う小学校募集から実施までの流れ

①マッチング

毎年の小学校募集は、前年度の 2 月ごろに始まる。次年度の交流につき、上半期と下半期に分け、図１のような学校募集をセンターの web 上に載せる。

平成 25 年度 下半期

関西国際センター研修参加者と小学校児童との交流事業について

国際交流基金関西国際センターでは、センター研修参加者と泉州地域（堺市を除く）の小学校児童との交流を通じた相互理解の促進を図るため、学校訪問等の交流事業を実施してまいりました。

交流事業は、以下のように、1.「学校訪問プログラム」、2.「研修参加者との交流会」の二つに分けて実施します。

●小学校児童との交流事業の種類

	1.「学校訪問プログラム」	2.「研修参加者との交流会」
交流日時	当センターが希望時期を指定します。 ※ 本紙２ページ、あるいは「交流申込書」の希望月をご覧ください。	小学校で希望日時を指定してください。 ※ ご希望日および研修参加者の希望によって、実施できない場合もあります。
	具体的な「日時」については、双方の交流相手が決まった後、担当者間で調整します。	
交流内容	具体的な「内容」については、双方の交流相手が決まった後、担当者間で連絡を行います。 ※ 交流内容の具体例については、4ページの「よくあるご質問」をご覧ください。	
交流実施場所	小学校 ※研修参加者の送迎には当センターバスを使用します。また、当センターの担当者が随行します。	小学校、関西国際センター ※当センターのホールもご利用いただけます。予約状況の確認が必要ですので事前にお問い合わせください。 ※ 研修参加者が貴校を訪問する場合、できる限り送迎をお願いします。
申し込み先	関西国際センター教育事業チーム（担当：東） 〒598-0093 大阪府泉南郡田尻町りんくうポート北 3-14 TEL 072-490-2601/2602、FAX 072-490-2801	
申し込み締め切り	2013 年 7 月 31 日（水）	交流希望日の 6 週間前

●H25 年度下半期の「学校訪問プログラム」：募集から交流相手決定・実施までの流れ

2013 年 6 月 センター⇒小学校 募集案内の送付 → 7 月 31 日(水) 小学校⇒センター 応募締め切り → 8 月上旬 センター⇔小学校 調整結果の連絡 → 8 月中旬～実施 1 ヶ月前 センター⇔小学校 日時・内容について調整 → 実施

- 1 -

図１　「平成 25 年度（下半期）」学校募集のお知らせ（一部）

（http://www.jfkc.jp/ja/H25exchange_school1.0612.pdf）

交流に応募してくださる小学校の数は、実際に交流可能な研修の２～３倍に上るので、日本語研修と学校とをマッチングすることが重要な作業になる。交流の時期や人数、日本語のレベル、それに交

流の趣旨や目的が合致しているかをチェックし、交流していただく学校を決定していく。

マッチングが終わったら実際に交流を行う日程を調整し、交流実施前にはセンターの担当者が実際に学校に出向き、細かい打ち合わせを行う。

研修参加者を乗せたバスをとめる位置から、上履きに履き替える必要があるかどうか、あるとすればその場所まで、細かいチェックを行う。担当者が実際に交流の現場を下見しておくことは非常に重要である。

②交流実施までの下準備

交流していただく小学校には、訪問する研修参加者の名前や国籍等を連絡する。小学校では交流を「総合的な学習」の時間に当てたり国際理解の時間に当てたりと位置づけはさまざまだが、交流する研修参加者の国のことを下調べしたり、調べたことをまとめて掲示するなど、事前に準備をしていることが多い（図２）。

図２　交流で使われる視覚資料（例）：上段は小学生が作成し掲示したもの。下段は研修参加者の作成し持参したもの

研修参加者の側は、伝えようとする自国の情報をまとめた小さいポスターを用意する（図２）。最近ではパソコンや iPad などの電子媒体を好む研修参加者もいるが、小学校の現状ではやはり紙の上に写真を貼ったり図示したりしたものが効果的だ。研修参加者の日本語のレベルによっては、口頭だけではなかなか伝わりにくいこともあるが、絵や写真があると伝わりやすい。

③交流当日

小学生との交流活動は、クラス全員と一斉にではなく小グループで行うことが多い。情報の発信もまたそれに対する質問もしやすいことがその理由である。1 コマ 50 分の交流時間があったとすると、25 分から 30 分くらいを研修参加者からのお国情報に当てることが多い。そして 20 分から 25 分ほどを小学生による日本文化の時間という流れになる。

また、場合によっては給食を一緒に食べたり昼休みに一緒に運動場で遊んだり、清掃時間に一緒に掃除をしたりすることもある、

図３　交流活動の一例

④交流後

交流実施後、小学生からは研修参加者に宛てたメッセージやお手紙などをもらうことが多い（図４）。小学生からもらったメッセージやお手紙は研修参加者にとっては貴重なものとなる。気持ちを込めて丁寧に書かれたものなので、研修参加者はそれを一生懸命に読む。普段手書きの日本語を読むことが

図４　小学生から研修参加者へ送られたメッセージの一例

少ない研修参加者だが、小学生からのメッセージなどは手書きにならざるを得ない。手書きの文書を読む機会という意味でも、これらは貴重である。

４．考察と今後の課題

小学生との交流は研修参加者にもまた小学校側にも非常に評判がよい。今後も継続していきたいと考えているが、より一層効果的な交流活動にするための方策を考え、課題を挙げる。

交流活動が学習者と地域とをつなぐことに大きく貢献していることは間違いないし、また研修参加者の日本語学習にも日本文化社会理解にも役立っていることに疑いはない。だが、具体的にどのように地域と学習者をつなげることに役立っているのか、研修者参加者が何をどのように学んでいるのかについての分析も手付かずの状態に近い。

小学校の交流現場では、小学生は普段自分たちが使っている言葉で研修参加者と話す。それは研修参加者が教室で学ぶ標準的な日本語よりは泉州弁と言われる方言の方が多いし、「普通体」という言い方だけでは説明しきれないスタイルで話す。また学校用語も多用される。研修参加者の中には自分たちの知らない日本語の世界に戸惑う者もいるし、理解できないことをそれほど気にせずに交流を続ける研修参加者もいる。

小学生との交流の場でうまくコミュニケーションできる能力は疑いなく重要な言語能力だが、それを測るスケールも作られていないし、その能力を養うための方法も確立されていない。日本語教室で教えている日本語なら教授法も評価法もある程度確立されているが、それは現実の日本語使用場面全てをカバーしている訳ではない。小学生との交流活動のような現場でのコミュニケーション能力をどう捉えるべきなのか、考察が必要となる。

また先にも述べた通り、センターの研修参加者との交流に応募してくださる小学校の数は、実際に交流可能な研修の２～３倍に上る。特定の小学校だけと交流するのではなく、新規に交流していただける小学校には交流趣旨を確認し合い、より効果的に研修参加者と地域とをつなげていきたいと考えている。交流活動の内容についても更に検討を重ねていきたい。

参考文献

今井寿枝・品川直美・野畑理佳（2009）「夏休み子どもワークショップ『世界中の仲間といっしょに』―関西国際センター研修参加者と小学生を対象とした国際理解ワークショップの実践記録―」『国際交流基金紀要 第５号』 国際交流基金 pp. 181－187

熊野七絵・品川直美・羽太園・田中哲哉・矢澤理子・西野藍（2009）「短期訪日コースのための教材開発―『日本語ドキドキ体験交流活動集』―」『国際交流基金紀要 第 5 号』 国際交流基金 pp. 135－150

国際交流基金関西国際センター（2008）『日本語ドキドキ体験交流活動集』凡人社

西野藍・川嶋恵子（2010）「国際交流基金レポート 12 体験交流を通じた学習のデザイン」『日本語学, vol. 29, No. 13』明治書院 pp. 98-107